

# 第10回「鉄道の日」記念 フォトコンテスト

受賞作品 および  
審査委員長のコメント



## ●記念フォトコンテストの審査を終えて

審査委員長 十文字義之

10月14日の「鉄道の日」を目途に、基幹輸送としての鉄道が多くの方々に対する認識と理解、更には親しみある鉄道の在り方をPRするため、全国の各運輸局において様々な取り組みを行っています。

国土交通省関東運輸局では、鉄道事業者で構成する「鉄道の日」関東実行委員会を組織し、PRの一環として管内における鉄道を被写体とする、「鉄道の日」記念フォトコンテストを毎年実施しています。本コンテストは、多くの方々が管内でとらえた鉄道をテーマとする写真作品を一般公募し、日夜欠かすことの出来ない鉄道輸送の親しみと認識、理解を得て頂くことはもとより、写真映像を通して新たな視点と鉄道輸送に対する再認識を得て頂くものです。その暁には、受賞作品の選考発表、表彰、公開するとともに、更なる鉄道に対する原点を見つめる一つの切っ掛けとなることを願っています。

本コンテストの審査においては、十文字義之(写真家・公益社団法人日本写真家協会会員)を審査委員長に、竹内健蔵(「鉄道の日」関東実行委員会会長・東京女子大学教授)、鈴木昭彦(「鉄道の日」関東実行委員会委員長・相模鉄道取締役経営統括部長)、原健人(原鉄道模型博物館副館長)、柴田秀幸(テレビ神奈川営業局営業部長)、中谷誠志(国土交通省関東運輸局鉄道部長)を審査委員に審査会を組織し、9月5日には268点の応募作品の中から事前の予備審査を行うとともに、9月8日に本審査を横浜第二合同庁舎会議室において運輸局職員立会いの下、公平且つ厳正なる審査を行ったことを先ずはご報告申し上げます。

審査の結果、最優秀賞1点、優秀賞4点、審査委員賞6点、フレート賞、テッピー賞(中学生以下)、テッピーナ賞(女性作家)各1点の計14点を選考し、以下の通り入賞者を決定致しました。最優秀賞に輝いたのは、鈴木克哉さんの「小さな撮り鉄フォトグラファー」で、幼児が土手に据えたカメラを見据え、新幹線を狙う姿をとらえた作品でした。その光景に審査委員一同、誰もがほっこりさせられ、小さな写真家にエールを送ったほのぼのとした力作でした。

今回寄せられた様々な視点で寄せられた作品群は、268点(前回419点、前々回362点)で、応募者数は昨年を51名減少し、151点減(前回160名、前々回144名)と応募者、応募点数共に昨年を下回る結果となりました。

一方、「フレート賞」は、暮らしと産業を支える貨物鉄道の力強さを表現し、旅客のそれに負けない表現力を備えています。また今回の「テッピー賞」も昨年に引き続き、低年齢層の優しい眼差しと観察力がより伝わる作品が多く寄せられました。上位入選された作品は、いずれも甲乙付け難いものがあり、鈴木さんの作品は審査委員の心を一つにした力作であったことは言うまでもありません。

鉄道フォトコンテストという観点では、基軸となる「輸送」「運ぶ」という概念を決して忘れてはなりません。分野を問わず輸送を見据える中で、生活に欠かすことの出来ないモードである認識と理解が重要になります。一方、一部の撮影者のマナーの問題が取り沙汰されています。被写体に対する敬愛の気持ちは、全ての被写体に対して共通します。一つ間違えると大きな事故に繋がることから、個々のルールとマナーの心構えを再認識して欲しいと思います。今後の撮影活動で、輸送モードに対する確かな目を十分養って頂き、ルールとマナーを守りながら、自らの作品を創出して欲しいと願います。

## ● 審査総評

応募された作品の総体は、①鉄道のシンボリックな車両そのものに焦点を置いたもの、②輸送機能としての駅空間における相貌、③路線環境(風景)と鉄道との調和、などの作画が大方で占められ、その季節感や時空間が十分表現されている。審査委員たちは、鉄道事業や映像分野に永年携わってきた方々ばかりで、言わばその道のプロである。寄せられた写真群は個々の著作者の想いが込められた自己表現であり、応募された全ての方々に賞を与えてあげたいのは、審査委員共通の思いである。一方、コンテストという位置付けでは、作品に甲乙を付けるという作業がどれだけ辛いものか、誰もが認識している。

審査委員は、寄せられた写真群を前に、審査規定をクリアし写真映像として優れた作品であることはもとより、応募者個々が一人の写真作家としてとらえ、著作権者自身が主催者に対してどのようなメッセージを送り、併せて個々の鉄道に対する眼差しや考え方、主催者の意図を十分汲み取り、審査する構えとしている。

応募者の性別構成比で見ると男性は94%で、50歳代～70歳代のウエイトが最も高く約60%を占める一方、女性は15%で60歳代が最も多い。とりわけ、昨年同様シニア層の写真熱が非常に高いものが伺える一方、10歳代の応募者数は16%にとどまった。デジタル化社会において、誰もが簡単に写真が撮れる時代。若年層は、SNS等、写真を撮る機会を備えていることから、スマホで撮られた作品が見られる。しかし写真撮影の簡素化はあっても、それがコンテスト作品に耐えられるかどうか、裏腹に敷居の高さがネックとなり、応募するまでに至らないという傾向があるのも事実である。鉄道愛好の世代をみると、必ずしもシニア層で占めている訳ではなく、低年齢層から高配まで同じ熱を持つ年齢層を問わないのが鉄道愛好の魅力でもある。自らとらえた写真でとどまっているものと、作品として創り上げるプロセスや責任がコンテストにおいては二極化していることも否めない。

一方で、当初は少なかった低年齢層と女性作家の進出が顕著に見えてきた。鉄道愛好家や写真愛好家という位置付けではなく、写真撮影が面白くなり写真そのものを楽しんでいる。鉄道に対する知識がなくとも、車両のフォルムの可愛さとか、女性の細やかな視点でとらえられている作品に好感が持てる。これまで、男所帯であった鉄道愛好の中で、女性の新たな視点と優しい眼差しが、新風を吹き込んでくれていることは喜ばしい限りである。

こうした、決して写真や鉄道愛好に対するキャリアではない、作者の感性や眼差し、写真の背景にあるメッセージ性が見え隠れするものがないと、第三者(審査委員)に対し何か刺さるものがないと伝わり難い。また、裏書データは審査中のチェックはするものにあくまで確認で、必ずしもタイトルやコメントが写真と一致していないことも多い。作者の想いはあるが、写真はそうは言っていない。現場に立ち、被写体に相対した時、これまでイメージしていた作画や思いにどれだけ近づけられるのか、が鍵となる。しかし、現実写真に思い通りにはいかず、結果として画像になると見事に覆されることも多い。一方で、想像していたものとは別の観点でとらえられる偶然性の面白さは写真の楽しさであり、真の醍醐味がそこにある。

●第10回「鉄道の日」記念フォトコンテスト入賞作品

最優秀賞	「小さな撮り鉄フォトグラファー」	鈴木克哉
優秀賞	「MONOCHROME SUMMER」	藤井理行
//	「未来に残したい風景」	山川健一
//	「夕景に走る」	南雲 誠
//	「月がお出迎え」	固山敏行

---

十文字義之審査委員長賞	「時空超え列車」	森本裕之
竹内健蔵審査委員賞	「春爛漫の参道」	松山 進
鈴木昭彦審査委員賞	「巨大雲出現」	竹村信雄
原 健人審査委員賞	「秋と京急と私」	松井美智子
柴田秀幸審査委員賞	「桜の季節に、ぼくが見た特急列車」	武川華苑
中谷誠志審査委員賞	「ブルーモーメントに咲く」	南 輝明

---

フレート賞	「立体交差」	戸崎安司
テッピ-賞	「いってらっしゃい」	辻本浩大
テッピ-ナ賞	「宵宮」	平野昌子

---

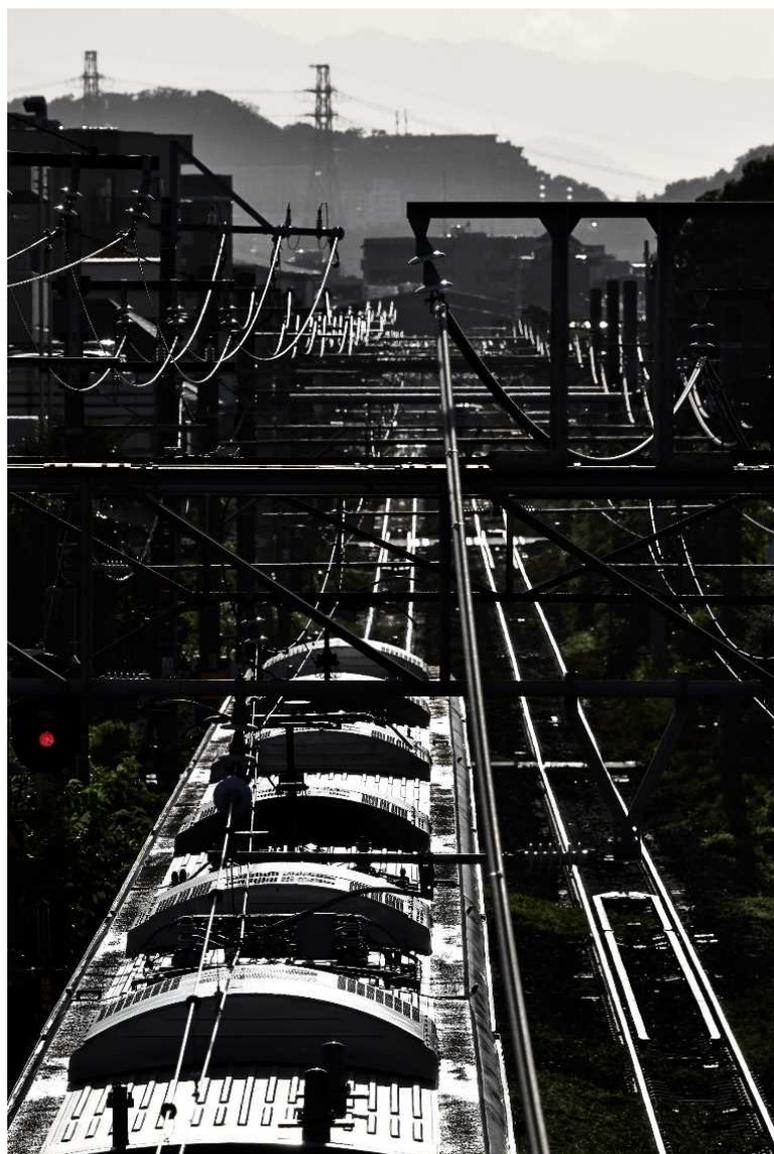
(敬称略)



## 最優秀賞 「小さな撮り鉄フォトグラファー」

鈴木 克哉さん

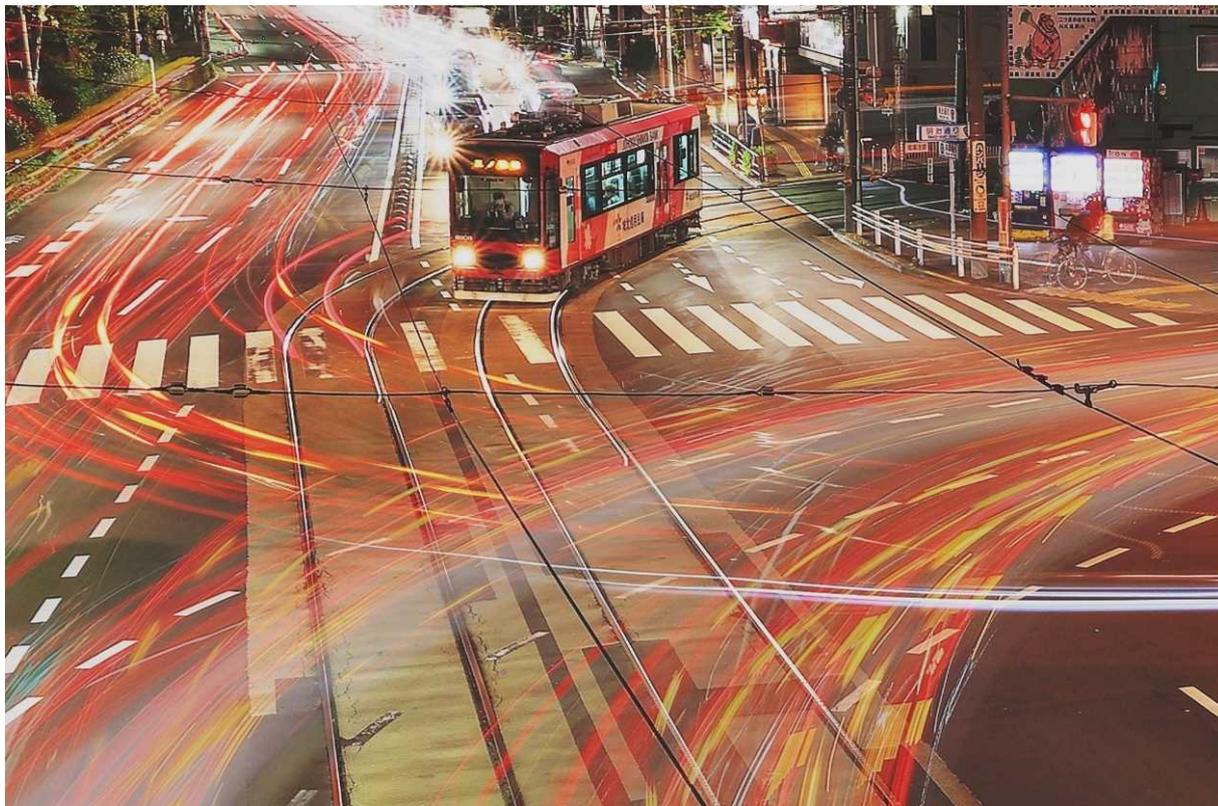
その被写体の滑稽さに、審査委員一同が注目した。土手から新幹線を狙う大人顔負けの幼児の姿が目に焼き付いて消えなかった。日頃から父親の撮影作業に同行していたという息子さんは、撮影手順を覚えてしまったという。澄み切った青空の下、颯爽と駆け抜けて行く新幹線。三脚に固定されカメラのファインダーを凝視し追う息子さん。その姿を見据えた鈴木さんの眼差しが、確かな親の目線で表現された。次代へ進む鉄路と息子さんの将来性にエールを送りたい。画角の正確性もしっかりとらえており、鈴木さんの写真に対する綿密性を認識した。息子さんを右に寄せたフレーミングも良かった。息子さんが撮った写真、果たしてどのような画だったのか是非見てみたい。



優秀賞  
「MONOCHROME SUMMER」

藤井 理行さん

殆どがカラー映像の作品で占める昨今、モノクロ映像はそれを寄せ付けないパワーを備えている。色ある被写体をハイライトからシャドウに至るグラデーションで表現するモノクロの美しさを再認識した。逆光が織りなす屋根とユニットクーラーの照り返し、伸びていく軌条頭面の輝きが良く表現され、藤井さん自身も写真を楽しむツボを良く知っているに違いない。露出もダークトーン寄りにしたことで、一層引き締まった作品に仕上がった。



## 優秀賞 「未来に残したい風景」

山川 健一さん

かつては、都内縦横無尽に張り巡らされた都電の路線網も、モータリゼーションの発達でその使命を終え、今や都電荒川線(東京さくらトラム)のみとなった。山川さんの年代から見ると、都電の全盛期をリアルタイムで知っている世代。都民の暮らしを支えた欠かすことのできない輸送モードを顧みて、現代に残された荒川線を再認識する眼差しを忘れてはならない。交差点で信号待ちをする車両、通り過ぎていく車の光跡を長時間露光で見事に捉えた。暖色系に染められた都心の姿に温かさを感じ、希少となった併用軌道が美味しく表現されている。限られた鉄路の将来と進展を願うばかり。



## 優秀賞 「夕景に走る」

南雲 誠さん

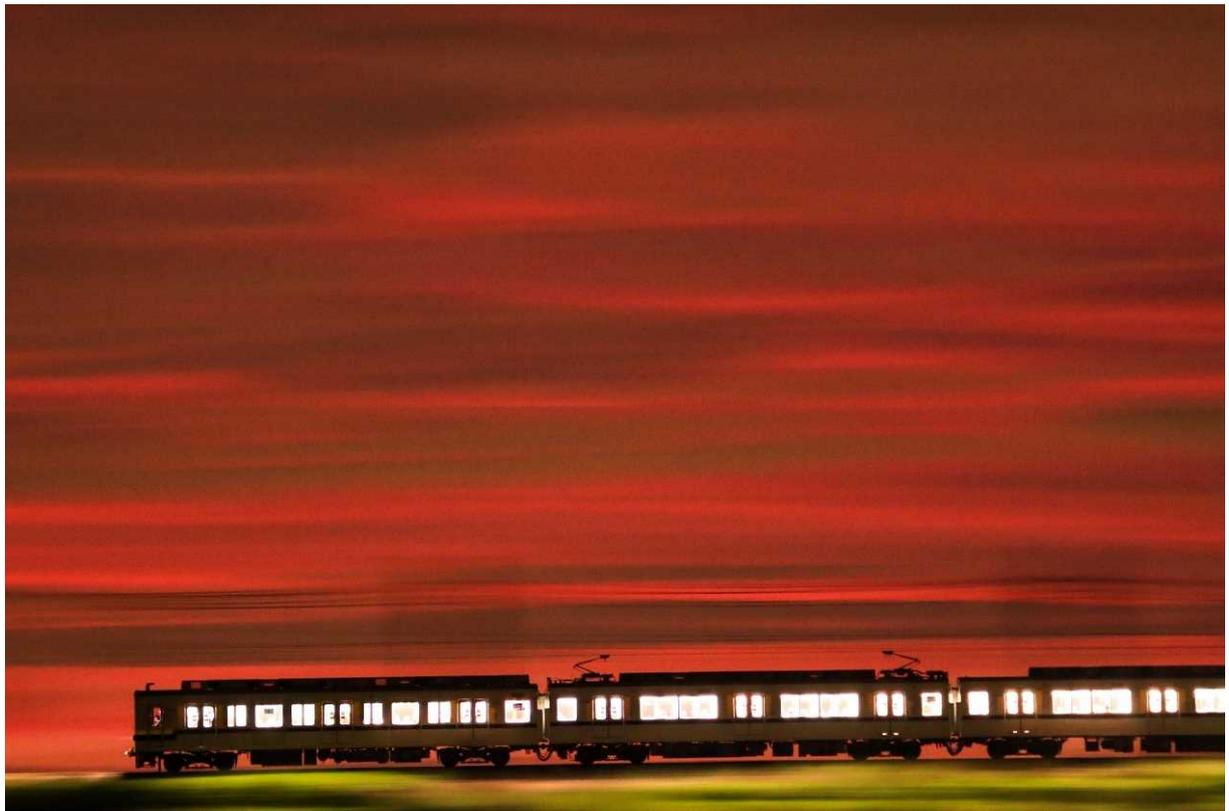
関東平野を南北に貫く常総線。取手～水海道間は複線区間で、以北から下館間が単線区間となるキロ程51.1kmの非電化路線である。複線区間の風景が水海道を過ぎると一変し、筑波山を背景とする田園地帯を単行が駆け抜けて行く。南雲さんは、時の経過とともに黄昏れていく情景を上手く表現している。築堤の伸び行く枯れ草、駆け抜けるディーゼルカーの流れ、雲の隙間からゆっくりと夕陽が落ちていく空気感が良く分かる。架線が無い分、空の広さが強調された。



## 優秀賞 「月がお出迎え」

固山 敏行さん

運行開始から2年、グッドデザイン賞を受賞した東武特急スペーシアX。そのフォルムは、他の車両にはない独自の美しさが表現された。日光東照宮陽明門に塗られた「胡粉(こふん)」の白を彷彿とさせるボディーの美しさとは裏腹に、夕暮れ時を駆け抜けて行く車両をシルエットに上手くまとめた。規則正しい架線柱、吸い込まれそうな広い空。フレーミングのバランスも申し分ない。写り込む月が同車を歓迎し、冬空の空気感が良く表現されている。



## 十文字義之 審査委員長賞 「時空超え列車」

森本 裕之さん

「爆焼け」した夕空に光跡を放ち駆け抜ける東武日光線。夕空をダイナミックに表現し、困難なシチュエーションでの流し撮りを成功させた森本さんの表現力に脱帽だ。同氏の写真撮影に対する姿勢、その心構えを熟知した上で、被写体との阿吽の呼吸が良く分かる。車両をシルエットにしたことで一層引き締まり、そのコントラストから時空を超えた未来への懸け橋となっている。一見、車両が模型にも見える錯覚にとらわれる疑似性の面白さ。積み重ねてきた森本さんの撮影スタンスに共感する。



竹内健蔵 審査委員賞  
「春爛漫の参道」

松山 進さん

鎌倉を象徴する鶴岡八幡宮から俯瞰した段葛の参道。境内の桜が見事に咲き誇っている正に春爛漫の相貌だ。鳥居を追っていくと、下馬のガードを渡る横須賀線が見え隠れする。その光景は、箱庭にも見え、玉手箱のようだ。ガードに高架化されたのが115年前のこと。それまでは、ここは踏切だった。併せて、江ノ電もこのガードを潜り鎌倉駅に近付け、現在の地とは逆に位置した。松山さんの優しい眼差しを感じ、鎌倉の街と鉄路との調和が良く表現された作品だった。



鈴木昭彦 審査委員賞  
「巨大雲出現」

竹村 信夫さん

秩父鉄道の橋梁をSLパレオエクスプレスが渡っていく。青空に出現した巨大雲が2つ覆い、雲の切れ間から太陽が差し込んでいる。牽引するC58形蒸気機関車と客車がシルエットとなり、幻想的な山間の雰囲気良く伝わっている。逆光の厳しい撮影環境の中、空を大きくフレーミングし雲を強調した選択は、竹村さんの綿密なフレームワークが活かされた。見方を変えると巨大雲がSLから立ち上がる煙にも見え、自然風景の雄大を感じた。



## 原健人 審査委員賞 「秋と京急と私」

松井 美智子さん

今や写真は生活の一部として親しまれ、より記録性の高いメディアとして活かされている。1日の流れを写真で追うと、それがフォト日記になり、過去を振り返ることもできる。松井さんは、朝の通勤時に何時もの公園にカメラを向けた。人影は誰一人写ってはいないものの、ブランコに乗る子供や、園内で寛ぐ市民の姿が見え隠れする。通り過ぎる赤い電車と紅く染まった公園、併せて写り込んだ自らの影も作品の一部として構成した彼女の親しみやすさが十分伝わる作品だった。



柴田秀幸 審査委員賞  
「桜の季節に、ぼくが見た特急列車」

武川 華苑さん

今年も満開に咲き誇った桜を背景に、勝沼の旧駅ホームで佇む息子さんを追った。初めて見る特急列車に釘付けとなる彼の表情は、後ろ姿でも良く分かる。懐かしの駅名標に懐かしさを感じ、鉄道への親しみが理解できる作品に仕上がった。また機会あれば、定期的な同じ場所に連れて定点撮影をすることをお薦めする。変わらぬ風景の中で季節の変化と子供の成長とともに、時の経過を感じて欲しい。



## 中谷誠志 審査委員賞 「ブルーモーメントに咲く」

南 輝明さん

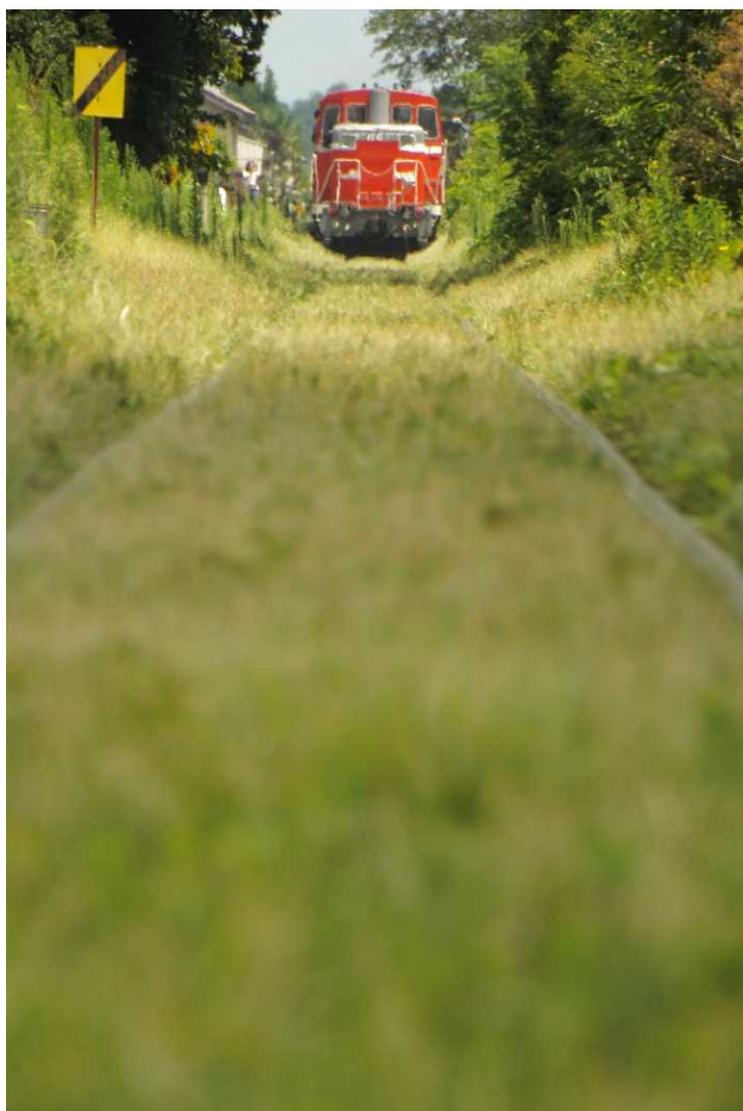
本コンテストでも毎年、小湊鐵道を題材にした作品のウエイトは高い。南さんは、昨年の最優秀賞を受賞したベテラン作家で、今年も同線の作品を寄せて頂いた。一期一会の精神で、持続継続した撮影活動で得られる確かな作品に、いつも安心感を得ている。ライトアップされた桜と車両が水鏡となり、幻想的な路線環境が表現された。同氏のテクニックもさることながら、確実に自らの作品に仕上げていく同氏のスタンスは、積み重ねてきたキャリアの賜物。今後もテーマに拘った南さん流の撮影活動に徹して欲しい。



## フレート賞 「立体交差」

戸崎 安司さん

産業と生活を支える貨物鉄道。近年、モーダルシフトの観点からも益々重要視され、環境にやさしい輸送の在り方を提示している。千葉みなと駅付近に行く、燃料輸送の貨物列車と千葉モノレール、幹線道が織り成す都市空間を見事にとらえている。街路樹の緑のコントラスト具合といい、街との調和が感じられる。戸崎さんは被写体に対して、その全体像を冷静に見据えることができる方だと思う。画面を構成する一つひとつの要素を整理し、画面構成していく同氏のスタンスに共感した。



## テッピー賞 「いってらっしゃい」

辻本 浩大さん

真岡鐵道線を行くディーゼル機関車を見送った。辻本さんの鉄路への愛着は、目線を一つにしたことで十分認識できる。草蒸した軌道を遠ざかっていく車両に労をねぎらい、「いってらっしゃい」の安全を願った彼の鉄路に対する敬愛と優しさが良く分かる。グリーンカーペットと化した軌道と朱のボディーが絶妙なコントラストを奏でている。焦点距離を最大限に活かした辻本さんの大人顔負けのレンズ捌きに脱帽である。



## テッピーナ賞 「宵宮」

平野 昌子さん

時間経過を写真に表現することは決して容易なことではない。刻々と変わる光と影を巧みに写し込む平野さんのキメ細かな視点に共感する。江ノ電沿線の小動神社の祭りの風景。腰越～江ノ島間の併用軌道は、賑わいを増して人が集まってきた。安全と定時運行を確保するべく、祭りのスタッフは江ノ電の往来を確保していく。暖色系の写真の中で、現場の空気感がよく伝わっている。地域と鉄路の共生がここにある。